

文化財は文化を構成してきた大きな要素の一つであり、同時に人間の生きてきた証しでもありま
す。モノを見れば、その時代どのようなものがあったかが手に取るように分かるのです。

だからモノは単に鑑賞の対象としてだけではなく、時代を解き明かす鍵としての役目があります



吉備国際大教授

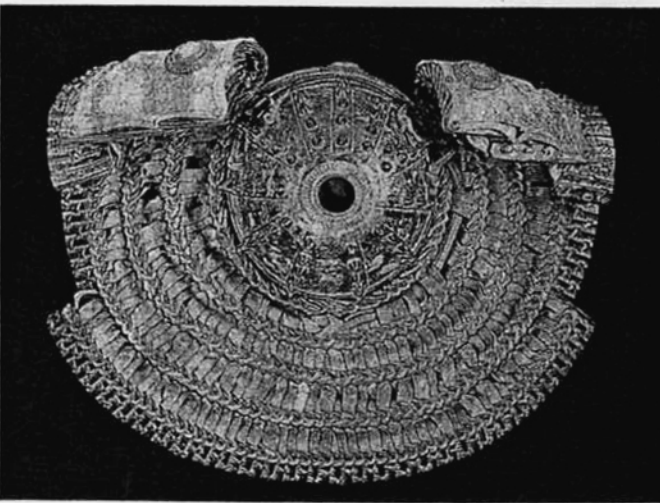
白井洋輔氏

す。人間が作ったモノを基準にして、人間の歴史やものの考え方、思想や美意識、そしてこれらの変遷の概観を知ろうとする時、あるいは空間の広がりにおける国際間の比較を試みようとする時でも、その普遍性と流行性においてモノ以上に顕然と文化を計れる標準尺はありません。

そしてモノはまきれもなく時代が作らせているのでも、例えば武器武具にしても、時代がモノを作らせていることは、はっきりと認識することが出来ます。平安末期〜鎌

時代のものご重厚さと政治の表舞台に主控として登場し、自らの手で新

しい時代を切り開こうとする自信と勢いが豪壮きとよんで現れているからなのです。そういったモノを作った時代の対称に目を少し移してみよう。



国宝赤草威威兜(あかがわおどしよろいかぶと) 平安時代末期
＝岡山県立博物館蔵

例えは写真の「越中頭形兜鉢」を見ると、同じ武家政權の最重要器物でもこれほど差うものかといえるほど、戦国という疲れた時代の有り様が現れて来ます。

時代を振り返って見る際、その時代のモノがわれわれに間接的にその時代を映しだして見せてく



越中頭形兜鉢 戦国時代＝瀬戸内市、遍明院蔵

【この兜の説明】戦乱が激しくなり、戦闘様式が変わると、士卒が戦力の重要な鍵を握るようになってきます。兵士すべてに武装させた方が有利になると、簡便なものを大量生産して時代に応じようとなりました。粗製なものであったが故に時代を経ると共に失われ、このような簡便なものは今日では少なくなってしまう、皮肉にも貴重なものとなっています。

れるのです。その役目が果たせるのは、モノは決してうそをつかず、時代を正確に映し映しているからに他なりません。

私のように人間の英知の遺産である文化財、日々顔を突き合わせるながら、時代とモノの本質的関係を現る仕事をして、実是最先端を生きていることからくる錯覚・付随した、自分たちが常識というゆめぼれと不安もあることが目につくのです。常に過去に對しても、そうして現在もモノから時代の特性や、人間とは何か、なを私は教えられるのです。

そしてモノは決して技術だけで作られるものではありません。またモノは作者だけが作るものでもありません。作器を求める側と一丸となって作っていくものなのです。だからその時代の全土の人人に、社会への義務感、目的意識や熱が無くなり、美意識が低下してしまえば、良いものが出て来はずがないのはそのためです。

国際的に見ても同様です。現代の科学技術の粋を集めて解明しても、決してあの500年以上前のハイオン・ストラディバリウス(の名器を超えるモノはもう作れない)となつていない事実、このような例は数え上げればキリがありません。私たちの国が今失いつつあるのは時代の勢いと謙虚な姿勢なのです。